

避難した地域住民のために1カ月間奮闘

区長として自主避難所を運営

高岡教区仏教壮年会連盟評議員 山本譲治さん

元日に発生した令和6年能登半島地震では、能登半島の東側付け根部分に位置する富山県氷見市の姿地区も震度5強を観測し、家屋の倒壊や損壊の被害が大きかった。57世帯113人が住む同地区の区長である山本譲治さん(64、長福寺門徒。高岡教区仏教壮年会連盟評議員)は、発生直後から地区の集会所を自主避難所とし、1カ月間、地域住民と寝食を共にした。震災から1カ月あまりがたった今、山本さんに話を聞いた。

地震発生直後、けた保が最重要と「早く逃ら津波の時は(高台)たましく鳴る津波警報 けてくれ」と地域中に 集会所が長福寺を自指す」という決まりがあるという。



被災状況の視察に訪れた氷見市の林正之市長、篠田伸二副市長を案内する山本さん(写真中央) = 2月3日

姿集落農事集会所には60人ほどが集まった。集会所を管理する区長の山本さんは、市指定の避難所は遠く、高齢者が多い同地区の住民には移動が厳しいと判断。その日の夜、集会所を自主避難所として開設した。

共に寝泊まりし、身を寄せ合う住民。余震におびえる日が続き、水道の復旧が遅れながらも、避難所の雰囲気は暗くなかったという。「ちょうど正月だ



自主避難所となった姿集落農事集会所

ったので、食べ物を持ち寄り、味噌汁を作ったり、漬物を漬けたり、鍋を囲んだり決して悲壮感はなかった。気が知れたみんなと一緒になれば不安が少しも紛れるという声もあった。昔からの顔なじみだから、心も落ち着き、自然と笑顔になる。ほかの避難所だと

水見市が開設した22と話した。

知らない人への気遣いもあり、ストレスを抱えてしまったのでは。もちろん、悩んだり苦しんでいても、明るく振る舞っていた部分はあろうと思うが」と地域独自の避難所の良さを話す。

一方、集会所には風呂がないほか、バリアフリー化されていないため、トイレの利用が困難な車イスの高齢者には男性2人が介助にあたった。また断水のため川水を汲み、トイレなどの生活用水として

山本さんは「家の解体など課題はたくさんあるが、いつか皆さんに地元に戻ってきてもらいたい、姿地区でまた生活できるような生活が」と願う。そして、住民の拠点となった避難所での生活を振り返り、「この1カ月、とにかく住民同士が助け合っていたかなければと、皆さんの協力があってこそ、避難所が成り立つた。お互いに支え合い、みんなで励まし合いながら、おたがいさまの心を感じた1カ月の共同生活だった」と話した。